

1 「あら 私の墓を掘っているのは」

「あら 私の墓を掘っているのは  
哀<sup>ヘン</sup>し<sup>ル</sup>みの<sup>ー</sup>苗<sup>ダ</sup>を植えているのは 愛するあなたかしら」

「いいえ あなたの愛する人は 昨日結婚しましたよ

お金持ちで 最高にきれいな女性と

『もう 亡妻<sup>つま</sup>に真心を尽くさなくても 5

傷つける筈もないし』と言って」

「じゃあ 私の墓を掘っているのは誰かしら

私に一番近い 大切な親戚たちかしら」

「いいえ 皆<sup>みんな</sup>な思案に暮れています

『花を植えても無駄なこと 10

墓をきれいに飾っても 死神の罠から

霊<sup>たましい</sup>を救うことは出来ないさ』と言って」

「でも 誰かが私の墓を掘るのよ

こそそと突<sup>つつ</sup>くのは 私の恋<sup>こいがたき</sup>仇<sup>かたき</sup>かしら」

「いいえ 人間<sup>ひと</sup>みなに いずれは閉まるあの門を 15

あなたが通ったと聞いたとき

その女性<sup>ひと</sup>は あなたをもう憎む価値もないと思って

永眠<sup>おやすみ</sup>の場所など 気にもしません」

「だったら 私の墓を掘っているのは誰かしら

教えてよ 私には思い付かないもの」 20

「ああ 僕ですよ 大切な奥様

あなたの愛犬です まだこの近くで暮らしています

僕がここを動きまわって

奥<sup>おやすみ</sup>様の永眠の邪魔をしたでしょうか」

「ああ そうね 私の墓を掘るのはお前よね 25

どうして思い付かなかったのかしら

忠実な者をひとりだけ あとに残してきたことを

いったい 人の心の中に

犬ほどの忠実さは  
あるのかしら」

30

「奥様 僕があなたの墓を掘ったのは  
骨を一本 埋めようとしたからです  
毎日の散歩の途中 この辺りで  
お腹が空くと困りますから  
すみません でもすっかり忘れていました  
ここが 奥様の永眠<sup>おやすみ</sup>の場所だなんて」

35

(近藤和子訳)